

ゆうこともゆき。

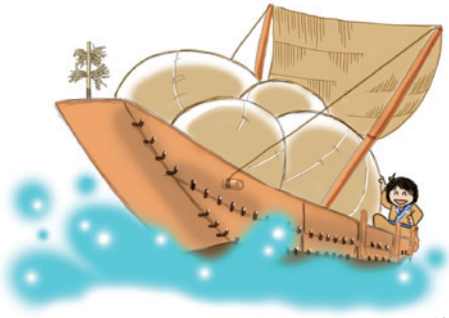


## なるほどアイヌ文化トーク ソッコ de ソッコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた  
本田優子(札幌大学副学長)と  
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、  
その魅力をソッコ(=お便り)形式で語り合います。



今月のテーマ **ウイマム(交易)**



イラスト/安田千夏

四月、新世界へのスタート！わくわく、どきどきの季節ですね。かつてのアイヌ社会では、異なる世界との接触交流の最たるものがウイマム(交易)でした。アイヌの人たち、北海道の豊かな自然に抱かれて生きてきたイメージが強いよね。もちろんそれはそれで正しいんだけど、実は外来の品々を隣諸民族から手に入れるために、大海原へも果敢に舟を漕ぎ出すアクティブな交易民でもありました。海洋船は、波が入らないように丸木舟に板を綴じ付けて舷側を高くしたイタオマチツ(板綴り舟)。これで、大陸まで渡ったんですって。

アイヌ社会では伝統的世界観を継承するために、物語がとても重要な役割を果たしてきたとされるけど、その中にウイマムが登場するお話のなんと多いこと！山ほどの毛皮を舟に積んでウイマムに出かけたアイヌが、代わりに様々な宝物を持ち帰り、それでカムイ(神)を祭る儀式をおこなう。カムイは喜び、アイヌに富をもたらす——幸せなアイヌ社会の姿です。交易活動は、アイヌ社会を豊かで安定的に維持するための圧倒的「善」だと考えられていたみたい。でも日本昔話の中に、異民族との交易が自分たちの社会を豊かにしてくれるなんてお話、ありません。やっぱり、交易はアイヌ社会を特徴づける大きな要素だと思えますね。



トネペレチシカーライヤホー、エコロミチイヤホー、ウイマムクスイヤホー、レーブンキワ…(なぜ泣いているの、お前の父さんは、交易に、沖に出て…)、と私が始めてウイマムというアイヌ語を聞いたのは白老の野本(のま)さんが歌った子守唄。

物語世界でのアイヌ側の交易品はクマの毛皮とシカの毛皮が圧倒的。和人側の交易品は「…いろいろな酒やいろいろな穀物やら…女子の宝ものやら女子の玉手ばこやら絹物やらよいものばかりたくさん船に積んで…」と語られる品々が、これらのアイテムはいわゆる舶来品。舶来品って言葉自体、死語となっているこの頃ですが、かつては、高級で、お洒落で、手の届かないって感じの、まさにウイマムに行かなければ入手できない特別なものだったんだよね。

十四世紀の記録には、津軽の十二湊(とせみなと)現在の青森県五所川原市)にアイヌと和人の船が群集してとても賑わっている様子が紹介されるなど、海峡を越えた自由な交易世界が広がっていたんだよね。でも、松前藩がアイヌとの交易の独占権を持つようになってからは、交易の場所や相手を限定され、海峡を渡ったり松前城下への往来も制限されたりと、アクティブであったアイヌの交易スタイルは変わっていったんだよね。

